

## 祁多佳の画蹟 上

わたくしをはじめて祁多佳の作品をとりあつたのは、昭和二十八年平凡社刊行の『世界美術全集』第二〇巻に何点かの図版解説を執筆したときであつて、そのなかにかれの緑陰聴泉図が含まれてゐた。しかしそのときはいづれも原蹟に接する違もなく、ただ先行の解説類に導かれて、一応責を塞いだにすぎない。実蹟と既刊図録類掲載作品の搜訪検討、伝記著録史料の蒐集考証など、祁多佳について具体的な調査研究に手をそめたのは、昭和三十三年、国華七九四号に村上与四郎氏蔵の山水図扇面の解説寄稿を依頼されたときである。通行の画史画伝の類、多くの図版解説は主としてこれらに依拠して作者の伝記や画風を説明するのが常套であるが、それら画史画伝の類が不備粗略であることを痛感したのはこのときであつて、そのために資料収集の範囲が予期に反して、厳密にいへば無方針にひろがつてしまった。これがいつはらざる當時の実情である。国華の解説文では、考証の根拠や経過を逐一のべたてゐるわけにいかないので、結果を手短に記すにとどめて擱筆した。解説を書いてしまふと、そのときは自発的に選んだ対象でなかったためか、執筆の作業過程で集積したものに対する執着はまったく消え去り、昭和三十九年にその前年の明清美術展を記念して刊行された東京国立博物館監修の『明清の絵画』に緑陰聴泉図の解説を執筆したほか、祁多佳との縁は切れてしまつたかに見えた。

ところが昭和四十四年の夏、知り合つたばかりの中国の友人黄君実君が同君所蔵の祁多佳筆後赤壁書卷末尾の写真を恵贈された。これはわたくしの国華解説を読まれたうへでの好意と思はれるが、この書卷の款記によつて、国華執筆の際もつひに究明し得なかつた祁多佳の生年が確定したのである。それと前後して、当時滯日中の旧知の

## 川 上 涇

シカゴ大学教授ハリー・ヴァンデアステンペン師から祁多佳の未知の二画蹟の存在を教示された。その一つが本誌二六九号図版第六所掲の作品である。またこの年の五月、『東洋美術大観』以来知られてゐる谿山孤亭図を研究所の同僚諸士が所蔵者諫早市小曽根均治郎氏邸で調査撮影し、わたくしもその秋、同氏所蔵の祁多佳扇面とともに実見の機に恵まれた。このやうな状況になってみると、十数年前の祁多佳との因縁もあらためて想起され、たとへ祁多佳が明末清初に雲の如く輩出した画家のうちでひときわ卓立した作家ではないにしても、わが国に二十点前後の作品が遺存し、しかもその多くは制作年時も明らかであつて、そのモノグラフは可能でもあり意味もあると思つたので、本誌に寄稿を約した。しかしながら性疎懶、考へてゐるうちに日はたつばかりで、つひに編輯上の迷惑を顧慮し、新獲の資料と年譜を提示するのみの「祁多佳の生年」を二六九号に掲載するにとどめた。

しかしこのたびは、これで祁多佳と縁を切つてしまふ氣は起らず、曲りなりにもモノグラフを書かなければといふ思ひが遣つたが、また／＼「迹不迫意」、ただ一応資料を提示するのみで、祁多佳自身の画業についても論究十分ならず、同時の画家の画蹟に論述の及ぶこともなくて、到底モノグラフの名に値ひしない。ひたすら江湖の叱正と寛恕を乞ふ次第であるが、この機会に、今日までの十余年間、祁多佳とのさまじまな機縁を与へられた諸賢の厚意に深甚なる謝意を表したい。

### 一

祁多佳の伝記史料、輯録の伝記、既刊の辞典類については、本誌二六

九号に列記し、張岱の陶庵夢憶の「祁止祥癖」を載録した。また国華七九四号の拙稿には、陶元藻の越画見聞を引いたので、今回は乾隆紹興府志、読画録、明画録、桐陰論画の記事を掲げる。

## 紹興府志卷五四、人物志一四、文苑

祁豸佳、字止祥、弟熊佳、字文載、山陰人。豸佳天啓丁卯（七年、一六二七）舉人、以教諭遷吏部司務。熊佳崇禎庚辰（十三年、一六四〇）進士、除南平知縣、召為兵科給事中。明亡之後、當事幣聘、皆却之。性嗜禪、日与老衲蒲團相對、談世外烟霞。間呼伶人、奏絲竹、親執管和之。其軌轍、大約相同。而豸佳工書善画、往往呵凍流汗以迄。熊佳杜門枯坐而已。（中略）〔熊佳〕家居数十年、与豸佳俱以寿終。

## 読画録卷一

祁止祥豸佳、山陰人。行五、世培（祁彪佳）中丞之從兄、予同門文載（祁熊佳）之胞兄也。丁卯拳於鄉、數入春明不得志。常自為新劇。按紅牙、教諸童子、或自度曲、或令客度曲、自倚洞簫和之、借以抒其憤鬱。甲午（順治十一年、一六五四）冬、送予北上、過金陵、留予家一月、至維楊始返。舟中為予作山水花卉四十葉、又別為數小葉、留一詩別余。曹顧菴（曹爾堪）曰、止祥書不在董文敏（董其昌）右、画則入荆關（荆浩、關同）之室。詩文填詞皆有致、能歌、能奕、能図章、以至撒錢蹴鞠之戲、無不各尽其致。以名孝廉隱於梅市。蓋異人也。

## 明画録卷五、山水

祁豸佳、字止祥、晚号雪瓢、山陰人、登鄉薦。書法絶類董文敏、山水宗北苑（董源）惠崇、出入于襄陽（米芾）橡林、蒼秀空溢、雖率筆草草、神韻自足。

## 桐陰論画上

祁止祥豸佳、山水做石田翁（沈周）、氣勢淋漓、筆力挺拔、自有一種不可羈勒之概、豁人心目。但蒼潤中、尚少靜逸之趣。學者師其長、而捨其短、何

## 在非精進之助也。

これら諸文献の伝へるところによって、祁豸佳の閱歴、性向、画業の性格等をほぼ知ることができであらう。豸佳・熊佳兄弟とかれらの從兄弟彪佳の三人の間には、かなりの性格の差が認められる。彪佳の文集である祁忠惠公集を読むと、風雅を求める心のあることは察せられるが、それはあくまで士大夫としての文心の余緒とも称すべきもので、屋敷の中に農耕地を設けて、子孫に農民の艱苦を教へる用意をととのへたりする点、さらに最期は国に殉じて自殺してしまったその生涯を顧れば、節義に生きた士人の典刑をそこに見出すであらう。引用を省略した部分で、紹興府志は熊佳の硬骨漢ぶりを述べてをり、その面では彪佳に似たところもあるが、明朝の覆滅が決定的となったのちは、「門を杜ちて枯坐するのみ」で、いはば消極的な抵抗に終ったと見るべきである。かれら兄弟を「その軌轍、大約あひ同じ」と紹興府志は評してゐるが、豸佳の行歴を記述した他の文献を見ると、この評は必ずしも当てゐるとはいへない。約言すれば祁豸佳は、明清革鼎、この体制の崩壊期に、多方面の芸能の素質を思ふがままに發揮し、士大夫の規矩からはみ出して、気儘な生活を送り、天寿を全うしたひとりといふことができる。

もとより祁豸佳にしても、はじめからそのやうな生涯を志向してゐたわけではなからう。進士及第の望みを失ったこと、さらに明朝滅亡といふ大勢の大変化が、諸芸に身をまかせる生活に入る機縁となり、性癖趣味に対する抑制をとりはらってしまったものと考へられる。現在われわれがその遺存を知ることのできる作品の数は、一中国画人としては多いといつても、紹興府志に「往往、呵凍流汗もつて応ず」とあるやうに、

生涯制作した作品は莫大なものであったと想像され、遺存作品のみによって画業の展開を精確にあとづけることはできないにしても、順治六年五十六才までの作品は、すべて扇面画冊の類ばかりである。そして挙人になってから四年後、三十七才作の山水図扇面（挿図1）は、士人の余技にふさはしい小品で、後年の諸作に見るやうな祁豸佳の気性や個性を感じさせるものではない。少くともこの時期のかれは、何人もの進士を出した家系の、山陰の名族祁氏の一員として、進士及第を志望する自己抑制の生活を送ってゐたことであろう。陶庵夢憶の記す祁豸佳の變童の癖が、いつごろからあらはれたかわからないが、南京で張岱に寵童の阿宝を見せたのが崇禎十五年四十九才のときであり、読画録が、歌舞音曲に熱中して、何回も進士試験に失敗した鬱憤をはらしたといっているのと考へあ

はせて、およそ崇禎十年四十四才ころが祁豸佳の生涯の転機であったと思はれる。しかし生活意識が一举に変わってしまったわけではなく、崇禎十七年甲申毅宗自勤のち、清朝が江南方面を完全に制圧するに至らず、明の遺臣が王族を奉じて抵抗してゐた順治の初年には、祁豸佳も監軍として台州に駐在し（陶庵夢憶）、体制的な一面を残してゐたことが認められる。現存画蹟に個性を発揮した本格的な作品の出現する五十五才前後に、生活意識の転換が完了したものと考へてよからう。

わが国伝存の画蹟が多いのに対して、本国に遺存するものは僅かであり、著録された作品も数点にすぎない。つぎに著録類の記載を要約して掲げる（穰梨館過眼録の法量は工部营造尺）。いづれも現存作品との符合を確認し得るものはない。

村上与四郎氏蔵

挿図1 山水図

祁止祥山水軸

紙本、高五尺三寸二分、広二尺五寸。

〔款印〕甲寅（康熙十三年、一六七四、八十一才）夏日、倣北苑筆法。祁豸佳  
祁佳印 朱文 祁止祥 朱文

穰梨館過眼録卷二七

紅豆樹館書画記卷八

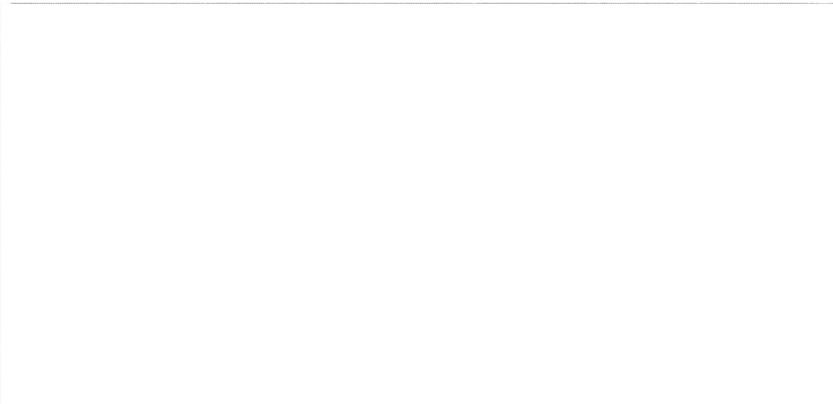
明祁止祥山水

粗絹本、高五尺四寸一分、寛二尺二寸。図倣子久（黄公望）秋林独坐、得其蒼莽疎逸之致。無意求工、復非一邱一壑者所彷彿。謝信齋家藏。

〔款印〕甲寅仲冬、倣黃子久筆、為天若詞社兄壽。祁豸佳 祁佳印 祁止祥 氏印

穰梨館過眼録卷二七

祁止祥山水軸



紙本、高六尺七寸六分、広二尺三寸一分。

〔款印〕 戊午（康熙十七年、一六七八、八十五才）秋仲写。 祁豸佳

祁豸佳印

白文 祥止 朱文

明祁止祥山水

紅豆樹館書画記卷八

絹本、高七尺四寸六分、寛二尺二分。止祥画筆疎秀、頗近北苑。此幅加以沉厚、自称用巨然法。董即巨然所從出也。画□之旨、師



插图7 山水図

插图6 溪山高隱図

插图5 溪山訪隱図

插图4 水亭觀魚図 橋本末吉氏藏



其意、不師其貌、斯足為能事矣。

(中略)

〔款印〕倣巨然法、於仙山樓閣。逸峯道人豸佳

之印  
豸止  
祥氏

吹鉢羅室書畫過目攷卷一

祁豸佳、字止祥、号雪瓢、浙江山陰人。天啓丁卯舉人、官吏部司務。鼎革後、隱梅市。工花卉山水。古肆見有設色花卉絹本直幀。

玉几山房畫外錄卷上

曹爾堪字子顧、号顧菴、浙江平湖人。

跋祁止祥画

止祥画不在董文敏下、画則入荆關之室。詩文填詞皆有致。能奕、能図章、以至奕錢蹴鞠之戲、無不各尽其致。以名孝廉隱於梅市。蓋異人也。

祁豸佳と同時の人曹爾堪（一六一七—一六七九、浙江嘉興の人）

が祁豸佳画の跋に「画は荆關の室に入る。」といひ、友人周亮工（一六二一—一六七二）がその跋を讀画録に引用しているが、祁豸佳の師倣した画家は唐末五代の荆浩、関同兩人であらうか。祁豸佳の画作には、明清、とくに明の後半から清初にかけての文人画家の多くと同じく、宋元画家に倣ふ旨の款識のあるものが多い。

もとより師倣された画家の画風筆法と、それぞれの作品の画風筆法との間に、造形上精確な対応關係が認められ、脈絡がたどれると考へるべきでないことは、中国絵画史家の常識である。しかしまったくでたらめな表記にすぎないと考へるのも早計であつて、とくに一画人の仿古の連作を通覧すると、そのすぐれたものにおいては、真蹟の遺存するものはその画家の、真蹟の伝はらない画

家についても、われわれが常識的に想定するその画家の作風の特色を画き分けてゐることが看取される。師倣する画家が師倣される画家に対して制作の際に、だく一種のヴィジョンの、あるひは師倣する画家の個性なり一作一作ごとの作画の意向なりとこのヴィジョンとの平行や同調や一致の標榜、といふやうな意味を容認してもいいのではなからうか。款識における師倣の表記をこのやうな意味に解したうへで、著録作品をも加へて祁豸

佳の画蹟を年代順に見てゆくと、まづ宋元明清書画家年表の記載する三十六才作の扇面は米芾、五十七才作の水亭觀魚図は呉鎮、翌年の緑陰聽泉図から七十五才作の倣董源山水図までの六幅と紅豆樹館書画記著録の八十一才作の山水軸が董源、六十六才作の雲峯暮靄図が巨然、紅豆樹館書画記著録の八十一才作の山水軸と八十三才作の倣黃公望山水図が黃公望、八十七才作の倣王蒙山水図と八十九才作の淺絳山水図が王蒙、年款を欠く作品では、董源一点、巨然三点、高克恭一点を数へる。このやうな師倣の表記を、五十七才(順治七年)ころまでは師倣画家模索の時期、その後八十才(康熙十年)ころまでは董巨師倣の時期、以後は元の四大

挿図14 滕王閣序并詩書卷跋 楊氏藏



挿図12 倣董源溪橋図

挿図13 倣董源溪亭図

家師倣の時期と解してさしつかへないのではなからうか。そして現存画蹟には、一つとして荆浩、関同師倣を標榜したものはない。曹爾堪の「荆関の室に入る」といふ評は、中国の本格的山水画の創成期における両大家の名によって、祁豸佳の画業を賞讃した言葉と解すべきであろう。

諸種の画伝類のうち、祁豸佳の画業を概言して正鵠を失はないのは、米沢嘉圃教授の指摘(国華七八〇号、溪山訪隠図解説)の通り、桐陰論画の評言である。また明画録に「山水は北苑、惠宗を宗とす」とあるのは、五十八才から七十五才、いわば画家としての祁豸佳の壮年期に、董源師

倣を標榜する遺作が多数を占める実情と符号する。(惠宗については対照すべき資料を欠く。) 明画録は全体として必ずしも良書とはいへないが、著者徐沁は浙江余姚の人であり、徐渭筆花卉雜画卷に祁豸佳のつぎに跋を書いてゐる(挿図17) ことにも何か近しさが感じられるが、祁豸佳に関する記述は適確と思はれる。

「晩に雪瓢と号す」とあるが、款印に雪瓢を用ひた例は、七十才の滕王閣序并詩書卷(挿図14)の「雪瓢居士」印が初見であり、後赤壁賦書卷(八十三才、美術研究二六九号挿図)も「雪瓢道人祁豸佳」と書してゐる。

## 二

祁豸佳の画風、その系統と年代的推移、絵画史的位置に関しては、すでに米沢教授の考説(『明代の絵画』昭和三十一年、繭山竜泉堂刊および前掲国華七八〇号解説)があり、多く付加すべきものはない。つぎに遺作の要項を年代順に掲げる。未見のものも多く、所在不明のものも少

挿図17 徐渭筆花卉雜画卷跋 住友氏蔵

くないが、将来出現の可能性を顧慮し、明らかにし得るかぎりのデータを記しておく。

### 1 山水図(扇面)〔挿図1〕

冷金箋墨画 一七・一cm×五一・五cm

村上与四郎氏蔵

挿図18 倣黄公望山水図

挿図16 秋景山水図

挿図15 倣董源山水図

〔款印〕庚午（崇禎三年、一六三〇、三十七才）夏日、写似「起貞

詞兄。」〔朱字〕 〔方印〕

2 山水図（扇面）〔挿図2〕

紙本墨画 一六・六cm×五二cm

〔款印〕己丑（順治六年、一六四九、五十六才）冬、写似「梓明詞

兄。」〔朱字〕 〔方印〕

3 溪江聴泉図（扇面）〔挿図3〕

金箋墨画 一六cm×五〇・五cm

橋本末吉氏蔵

〔款印〕庚寅（順治七年、一六五〇、五十七才）夏、写為「水府

詞宗。」〔朱字〕 〔方印〕

4 水亭觀魚図〔挿図4〕

紙本墨画 二一九cm×八五・八cm

橋本末吉氏蔵

〔款印〕倣吳仲圭（呉鎮）法、「庚寅秋、写似」舍章詞社兄。」〔朱字〕 〔方印〕

豸佳〔朱字〕 〔方印〕

5 緑陰聴泉図〔図版第五〕

絹本墨画 一六一・二cm×四三・六cm

柴田源七氏蔵

〔款印〕辛卯（順治八年、一六五一、五十八才）嘉平月、倣北苑

（董源）筆法。」〔朱字〕 〔方印〕

6 溪山訪隠図〔挿図5〕

統本墨画 一三七・一cm×四三・四cm

〔款印〕壬辰（順治九年、一六五二、五十九才）季冬、写於「僊山

閣。」〔朱字〕 〔方印〕

7 溪山高隠図〔挿図6〕

統本墨画 一四七・九cm×四四・八cm

〔款印〕甲午（順治十一年、一六五四、六十二才）冬日、倣董北

苑」筆意。〔朱字〕 〔方印〕

8 山水図〔図版第六〕

統本墨画

〔款印〕甲午冬日写。」〔朱字〕 〔方印〕

9 山水図〔挿図7〕

墨画 一九七・五cm×四八・八cm

〔款印〕丙申（順治十三年、一六五六、六十三才）仲春、写於（以

下十五字不可説。」〔朱字〕 〔方印〕

10 倣董源山水図〔挿図8〕

墨画 一二四・八cm×四三・四cm

〔款印〕丁酉（順治十四年、一六五七、六十四才）季春、倣董北

苑」筆意。〔朱字〕 〔方印〕

11 山窓寄傲図〔挿図9〕

統本墨画 一五一・八cm×四四・八cm

大阪市立美術館蔵

〔款印〕丁酉仲秋、写於「曲水園。」〔朱字〕 〔方印〕

〔右下角鑑蔵印〕〔朱字〕 〔方印〕

12 松林山水図〔挿図10〕

絹本墨画 一二六cm×四三・四cm

〔款印〕戊戌（順治十五年、一六五八、六十五才）仲春日、為「友

雪詞客寿。」〔朱字〕 〔方印〕

13 倣巨然雲峯暮靄図〔挿図11〕

〔款印〕己亥（順治十六年、一六五九、六十六才）夏、倣

巨然、師「雲峯暮靄圖。」豸佳

祁印  
 朱字  
 祥氏  
 白字

倣董源溪橋圖 〔挿図12〕

墨画 一八九・三cm×七六・一cm

〔款印〕壬寅（康熙元年、一六六二、六十九才）夏、倣北

苑」溪橋圖、似」期翁年社兄請」教。祁豸佳（二印）

倣董源溪亭圖〔挿図13〕

統本墨画

〔款印〕癸卯（康熙二年、一六六三、七十才）春日、倣北

苑」溪亭筆意。」祁豸佳」

多祁  
 佳印  
 方白  
 印字  
 祥止  
 方朱  
 印字

谿山孤亭图〔图版第七〕

一  
二〇・三  
cm × 四三・六  
cm

小曾根均治郎氏蔵

〔款印〕丙午（康熙五年、一六六六、七十三才）仲秋、写

於「鶴伴居。」  
「祁豸佳」

祁佳印  
 白字  
 方印  
 止祥  
 朱字  
 方印

倣董源山水圖〔挿図15〕

絹本 二七cm×四九・四cm

〔款印〕戊申（康熙七年、一六六八、七十五才）冬日、倣董北苑

山陰祁豸佳」(二印)

秋景山水図  
〔挿図16〕

一五四・五cm×四三・九cm

〔款印〕己酉（康熙八年、一六六九、七十六才）冬日写。」祁豸佳

祁印  
 方印  
 止  
 祥氏  
 方印

祁豸佳の画蹟 上

傲黃公望山水圖〔挿図18〕

絹本墨画 一五〇cm×五四cm

〔款印〕丙辰（康熙十五年、一六七六、八十三才）秋抄、仿大癡

筆、似「而栗年世兄。」山陰鑑湖長祁豸佳

佳豸  
（白字方印）

止祥  
（白字方印）

佳豸  
（方印）（白字）  
氏止祥  
（方印）（白字）

倣王蒙山水圖  
〔挿図19〕

アート・インステイト・オブ・シカゴ蔵

〔款印〕庚申（康熙十九年、一六八〇、八十七才）秋仲、倣黃鶴山

樵（王蒙）筆「意、奉祝」□道兄六裳榮壽。」八十七叟祁豸

佳  
 彡 祁  
 佳 印  
 ( 方 白 )  
 方 印 字  
 氏 止  
 氏 祥  
 ( 方 朱 )  
 方 印 字

祁印  
 佳  
 方印  
 白字  
 止祥  
 氏  
 方印  
 朱字

一七

傲王蒙山水図 アート・インスティ  
テュート・オブ・シカゴ蔵

插图20 浅绛山水图

## 21 浅絳山水図〔挿図20〕

絹本淡彩 一六四・五cm×四六・四cm

〔款印〕倣黄鶴山樵筆意。一八十九叟（康熙二十一年、一六八二）

祁豸佳（二印）

制作年次の明らかな画蹟は右の二十一点であるが、年代未詳の遺作には、本誌二六九号に掲載した仿巨然山水図のほか、静嘉堂蔵の山水図扇面（『静嘉堂鑒賞』支那画部に「雲煙養素」中の一とするもの。金箋淡彩）、小

曾根均治郎氏蔵の山水図扇面（金箋墨画。華岳筆石松図と一幅に合装）、『尚美資料』第四編第四輯掲載の倣米芾山水図扇面（廉南湖氏蔵、金箋墨画）、水墨山水（倣巨然、紙本。大正九年十月某家売立目録）、山閣聴泉（大正十年十月高橋光威売立目録）、仿房山（高克恭）山水（大正十二年二月山田伯爵家売立目録）、水墨董法山水（紙本。小西氏吹拳氏売立目録）等をあげることができる。

これら画蹟に関する卑見は次節においてのべる。（未完）

## 図版要項

## 一 川上冬崖筆 樹木図（原色刷）

長野 矢島 武氏蔵

紙・水彩 縦三一・四cm 横二五・四cm

## 二 同

山水図

長野 某 氏蔵

麻布・油彩

一・二 隈元謙次郎 「川上冬崖の樹木図」図版解説参照

## 三 山下りん筆 福音 天使ガウリイル

亜鉛板 油彩 縦四九・五cm 横二五・五cm 千葉 須賀正教会

## 四 同

救世主聖十字架の聖像

同

麻布・油彩 縦一三〇・八cm 横八二cm

三・四 岡畏三郎 「山下りんの伝記と作品」参照

## 五 祁豸佳筆 緑陰聴泉図

滋賀 柴田源七氏蔵

絹本墨画 縦一六一・二cm 横四三・六cm

## 六 同

山水図

東京 某 氏蔵

紙本墨画

## 七 同

谿山孤亭図

長崎小曾根均治郎氏蔵

紙本墨画

五・七 川上 涇 「祁豸佳の画蹟 上」参照

## 八 ベゼクリク第四号窟寺第四主題 誓願図

ソ連 エルミタージュ博物館蔵

## 九 同

部分

土壁彩画 縦二四〇cm 横三一〇cm

八・九 上野アキ 「エルミタージュ博物館所蔵 ベゼクリク壁画誓願図について」参照